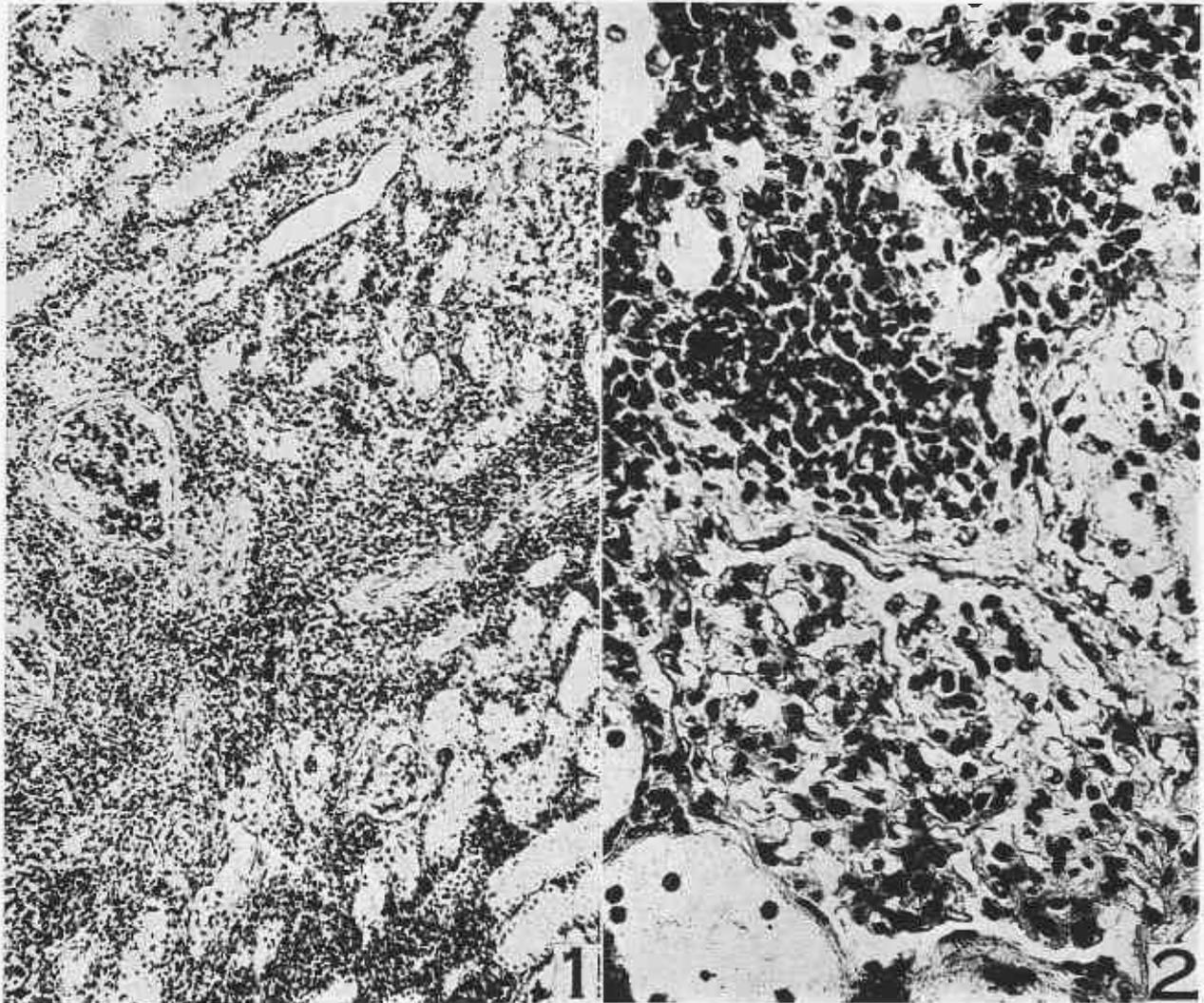


日 生 研 究 報 告

第 8 卷 昭和 37 年 9 月 第 9 号



形質細胞を多数に認めた猫の慢性間質性腎炎

北里研究所および麻布獣医科大学出題・第 1 回獣医病理学研修会標本 No. 9

猫の白血病例が、最近、比較的多いという報告が、アメリカの獣医学雑誌に記載されていた。この例は、ペルシャ猫で、腹部が著しく大きくなり、腹水と、硬い鶏卵大の腫物が体表から触知され、死後剖検されたもので、臓器の肉眼所見では、肝の球状腫大、腎の灰黄白色腫大等、一見白血病を思わせたが、組織学的検索の結果、腎臓には写真のように、間質性腎炎の所見が強く、特に多数の形質細胞が参加していることが目立っている。ボウマン氏嚢の周囲または血管の周囲に特に著しい。写真に

黒く多数、見える細胞のほとんどが、ピロニン-メチルグリーン染色により形質細胞であることが確認された。尚これらの細胞浸潤部以外に、炎症肉芽巣様の個所も認められる。その他の臓器では、脾臓および肝のグリソン氏鞘に軽度に形質細胞の浸潤が認められた。本例は血液検査が行なわれておらないので、血液像が不明であるが、腎臓の所見では、まず、慢性の間質性腎炎と診断した方が無難と考えられる。(H.-E. 染色)